

## 健康教育への指向

富山県農村医学研究会

会長 豊田 文一

1980年、ハンガリヤのペーチ大学で行われたヨーロッパの健康教育に関するシンポジウムに参加する機会をえた。欧州各国から多数の参加者があり、とくに目立ったのは女性の数の多かったことである。それらの人々は、保健婦、看護婦、ケースワーカー、行政関係の人々で、熱心な討議が行われ、健康管理の啓蒙、その事後処理の進め方が主なものであったが、特に保健行政の面での組織活動が、私に多大な印象を与えた。

最近、日本でも健康教育という言葉が浸透しつつあるが、その方法論に終始しているきらいがあり、実践面では未だしの憾がある。これは日本の医療制度の然らしむるものであり、最近実施されようとしている老人保健法関連の成人健康管理の実現をみた場合、健康教育は絶対に等閑視するわけにはゆかない。

私自身医師として診療にあたった場合、それらの人々に療養に関して指導している。これも健康教育かも知れないが、それは個々の人達に対するものであり、極めて小さい限られた面である。ここにかけた健康教育は、本研究会の指向する農村の健康を守る運動という大きな目標で、私どもは、過去の調査研究の成果を基礎として、新しい構想をもって健康教育を展開したい。もちろん地域の健康問題と健康水準の研究は、その基本であることは論をまたない。このことは会員各位の努力によって解明されつつあることは事実であ

る。ただ、その地域の人々の健康に対する理解度と協力度は、果してどうであろうかというといささか疑問である。私は農村の健康管理を行いながら、健康維持のため指示を与え、あるいは発見された病気に対し治療の方針を示す。しかしその後の事後調査において、約半数は放置のままでいる。

私どもの考えなければならぬことは「どうすれば実行させることができるか、実行できない条件は何か」このことに思いをいたすことは極めて必要であり、今後この方面の研究をすることが重要課題である。問題がここにしばられてくると、農村地域の健康問題に対する理解度と協力度が必要になってくるし、その地域の保健行政と密接な関係をもちながら、また地域の健康生活についての伝統、文化、慣習に入りこむことも大きな条件であろう。

本研究会は、昭和57年度の重要課題として健康教育をとりあげた所以もここにあり、会員各位とともに巾広い組織活動が必要である。その目標を設定するならば、地域住民の保健ニーズに如何に適合させるか、保健サービスに関する指導者を如何に利用するか、地域社会の連繫を強めながらどう浸透させるか、お互いにこれらの問題点を考察しながら、農村の健康を守る運動を推進してゆきたいと考えている。